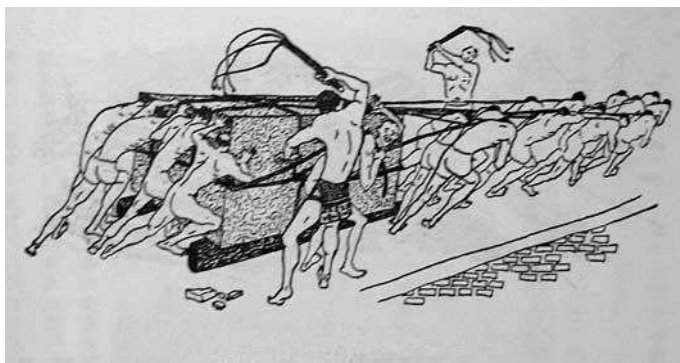


故郷を離れた友人が先日親族の法要に参加して「そろそろ自分の墓の心配を…」と思ったそうです。社会構造や生活スタイルの変容が激しい昨今では、お墓の形態も多様化しています。海外の大きな墓としては、エジプトのピラミッドや中国の始皇帝陵などがありますが、日本にも大きな古墳がありますので、墓としてその大きさに仰天するほどの人は少ないかもしれません。しかし、大きな墓の築造には大量の労働力が必要です。数十年前までは、巨大ピラミッド建設には右図のような奴隷が強制的に働かされていると考えられていました。近年の発掘調査では、ピラミッド建設作業員が二日酔いを理由に欠勤届けを出していたことなどが判明し、作業員の同意を得た労働環境の下で作業が遂行されていたようです。日本の場合はどうだったのかわかりませんが、作業員の理解を得ていたのではないのでしょうか。しかしながらなぜあのように巨大にしたのかが問題です。



墳墓で行われていた儀礼に対する意味としては、伝統的に首長権継承が主張されてきましたが、近年では鎮魂の考え方が提唱されています。最近の発掘で得られた情報が追加されて提唱されているので説得力があります。先代王の厳しさが神の力となって現実世界に災いを巻き起こすのは困ります。安らかにあれと魂鎮めを願ったのか知りません。一方で古代



墓上祭祀模型(出雲市大津小HPより)

の跡目相続にもお家騒動があったのではないかと友人は妄想しています。最有力候補が圧倒的であれば、反主流派は静かに粛清されたでしょうが、複数の候補が拮抗していたならば多数派工作が必要になってきます。優勢な候補が人を集めて先代王の墳墓を構築し始め、その作業への協力を支持表明とします。候補らの力が拮抗するほど墳墓は巨大化したのかも知りません。候補を次代の王とすることに躊躇していた先代王の側近や配下の人も協力を促され、ついには少なくとも見かけ上はまとまります。完成した墳墓の上で盛大なセレモニーが進行し、神がかり的な

パフォーマンスが繰り広げられます。集団中枢部の駆け引きを知らない一般民衆は、それを神が先代から次代の王へ乗り移った瞬間だと信じたことでしょう。墓上のパフォーマンスを心から疑わない純朴さが古代人にはあってほしいと友人は考えているのです。

“弥生青銅祭器の終焉を迎え、古墳祭祀に交替していく”などの表現をよく見かけますが、古墳も盛り土で高められた墳墓の一形態であり、“墳丘祭祀”と視野を広く見ればその中にも変遷があるわけです。藤田先生は、「通路を閉鎖して突出部を完成させるのは山陰の四隅突出型の墓が最初です。墓の聖域を完全に封鎖する思想の出発点は山陰の墓にあり、突出部を作るという墓作りの嚆矢、先駆けは前方後円墳や前方後方墳でなく、四隅突出型墳丘墓にあります。」と説明されました。先進的に墳丘祭祀に移行し、穏やかにその思想を熟成していった四隅突出型墳丘墓でしたが、畿内に根付いた勢力はその新しい思想をより先鋭的に活用し、急速に発展させて前方後円墳の概念を完成させたのでしょう。そしてその武威の象徴として巨大化を図り、周辺地域からの連携を促していったのかも知りません。

右の図は広島歴史探訪フィールドワークの配布資料に掲載された解説図です。最終段階に飛躍があるようにも見えますが、突出部の拡大・発展の流れは明瞭です。前方後円墳のように前方部が一つの突出部の拡大と見ると、最終段階に至る前の段階の全体像は対称性の悪いもののように思えます。物理学では、「対称性の自発的破れによって素粒子がバラエティーに富む質量を持ち、自然界は複雑で豊かな多様性を持つに至った」と考えられています。人間の集団社会でも、ときにバランスを崩した特異なものが、エネルギーに膨張することがあるのではないのでしょうか。

